

D 国語問題

注意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべて黒鉛筆または黒のシャープペンシルで記入することになっています。
黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。
なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷ついたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のように黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきらずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
○ 1
○ 2
● 3
○ 4
○ 5

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答题紙に書くこと)

旅をする時、目的をきめた上で、きちつとスケジュールを立て、前もって旅館を予約し、予算を立てて出発する人がいる。これに対して、目的もきめず、もちろんスケジュールなぞ気にせず、旅館の予約など一切せず、予算を気にせず出発する人もいる。性格とかタイプの違いと言ってしまうとそれまでだが、ここにはやはり、スタイルの違いと言えるものがあるようである。直線的で厳格なスタイルが好きの人と、曲線的でルーズな道くさを喰うスタイルの好きな人との違いにそれは還元できるかも知れない。このように考えてみると旅もやはり人生の一種の縮図であるから、旅について言えることは人生についても言えるようである。生涯をきちつと予定を立てて過す人と、道くさを愉しみながら過す人のスタイルの違いを、特に後者に照準を合わせながら語った昔話に、日本版のトリックスター野兎とも言うべき、豊後の吉ちよむ噺(ふつう「三年寝太郎」として知られている)がある。吉ちよむは、他の人のように、目標をきめて働いたりせず、三年間まったくのらりくらりと過す。ところが三年経つと人があつということを考えたり、実現したりして、生活の中に思いもかけない新しい要素を持ち込む。吉ちよむは、人が彼のことを忘れていてと考えていた間に、定型化してしまったチャネルをはずれるか、これをまったく別のものに組み変える方法を考えていたということになる。ただし、人によつては、反復的な作業をしている時の方が、色々と考え事ができるといふ人もいるから、これはまったく身ぶりと思考の関係が人によつて違うと言うより外はないかも知れない。しかしながら吉ちよむ噺は、文化が、一般にうけ入れられるスタイルと反すると思われるような部分をも許容していることを示すものである。

私個人の旅のスタイルも一所不住といつてしまえば、そういう形をとっているかも知れない。大抵のことは、命にかかわらない限り、成り行きに任せることにして旅に出る。このたびの旅(一九八〇年十一月―八一年一月)にしても、出発点からつまずきがあつた。空港ターミナルでビザに手落ちがあると指摘され、三日出発を延長し、ニュー・ヨーク大学で講義するはずだったのを一週間延ばし、かわりにカナダのバンクーバ経由でトロント大学

へ向^{むか}った。トロント大学では偶然フランス研究科主催の「演劇性」についての国際シンポジウムが行なわれていたので、渡りに舟とばかりにこのシンポジウムに参加した。おかげでフランスのベルナル・ドールのようなブレヒト研究者や、サミュエル・ベケットの研究で知られるラビー・コーン女史と、思いもかけず色々と思見を交わすことができた。これは曲線的スタイルの⁽⁴⁾一つの現われではないかと思っている。こうした出発から予想されるように、私の旅のコースは外れっぱなしで、元に戻る気配は一向にない。

⁽⁵⁾旅についての二つのスタイルは、別の形で言えば、台本と即興性という演技の二つの型に還元することもできるようである。台本に定められた通りのコースを歩む旅には危険性が伴わない。あらかじめ定められたコースでは偶発性に由来する危険性は注意深く排除されている。色々冒険が仕組まれていても、それは解決可能な範囲に限られている。台本が扱える（消費できる）限りの現実の中でしか、台本は書かれない。特に身体と精神が演技という形で表現できる範囲に、台本の書き割りは限定される。

これに対して即興性に基づく旅では、新しく現われる要素や事情に応じてスケジュールを立てなおし、時には軌道からどんどん外れて行く。従って振幅が極めて大きくなって行くけれど、また危険の伴うことも多い。ある意味では即興ということは、外見上即興に見えるだけで、それほど即興ではないということが言えるかも知れない。というのは、即興は、よほどの訓練を予め積^{あらかじ}んでおかないと成り立たないからである。イタリア喜劇の例を見るとよくわかるはずである。イタリア喜劇は本来即興に基づく滑稽劇であった。台本などなく、各々の上演のたびに座長役者が、「今日はこれでいく」と粗げずりな筋を伝える。すると舞台で役者たちは、自分たちが各々自家葉籠中のものになっているラッチ（ギャグのような趣向）を場面に応じてどんどん取り出し、得意即妙の演技を展開する。であるから即興と言っても無から有をひねり出すわけではない。むしろかなりの場面に対応できるようなラッチに属するものを訓練によって蓄えておく。とすれば、二人のイタリア喜劇役者が演じたのはゲームのようなものであったはずである。一つの情景または場面について、一人がいくつかのラッチの中から選び出して問いかける。それに対して、またいくつかのラッチの中から選び出して他方が答える。

とはいうものの、ラッチにしても有限であるから、どんどん新しい持ち駒を加えて行かないとマンネリズムに陥る。十八世紀になってイタリア喜劇が衰退したのはそのせいであると言われている。

いずれにしても、台本と即興とは、生活の中の演技、旅の身ぶり、思考の型といった様々の領野に対して適応可能な対比である。そしてこの二つの極が個人のスタイルを決定すると言えるだろう。台本による演技が時には因習的に見えて、即興に基づく演技が新鮮に見えるのは、前者が予測可能な手づきをふむのに対して、後者が予測不可能な要素を帯びているからであろう。後者は、仮りにラッチ的に既に存在する定型を使用しているにしても、新しい組み合わせという形で、因習的な表現の中で余り知られていない現実、つまり異物をとり込む余地を多分に持っている。つまり、スタイルの中には公のスタイル、時代のスタイルと個人のスタイルがあるとすれば、個人的スタイルは、それが抱えこむこと⁽⁷⁾の出来る異物の許容量の大きさによって決定されるということになるかも知れない。

(山口昌男「旅の文体」による)

(注) トリックスター——神話や民間伝承に現れるいたずら者。野兎として描かれることもある。

問

- (A) ——線部(1)について。その一例として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
- 1 旅に出るときは旅館の予約や予算など気にせず、ルーズに楽しむ方が人生も充実する。
 - 2 事前に旅の計画をきちんと立てる人は、その生涯もまた厳格に予定を立てて過ごす。
 - 3 特に目標なく、漫然と日々を過ごしている人は、旅に出たときも無駄な時間を過ごす。
 - 4 人生の目標を定めて日々計画的に生きること、旅の予定なども立てやすくする。
 - 5 自由気ままに楽しく生きている人こそ、道くさを喰う旅のスタイルを選ぶべきである。

(B) ——— 線部(2)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 社会一般においては勤勉に働くことが称賛されがちであるのに対し、文化はむしろ自堕落ともいえる生活を送る人々から生み出されることも多い。

2 文化とは日常生活からかい離れたところに成立するものであって、そうであるからこそ、周囲から怠け者と評価されている人々の生き方を否定してはならない。

3 一般の人々が目標を決めた計画的な生き方を是とするのに対し、文化はこれと対照的な、道くさを愉しみながら過ごす人の生き方に価値を見出す^{みいだ}ことがある。

4 旅が計画的なスタイルと行き当たりばつたりのスタイルを共に許容しているのと同じく、文化もまた、人々の様々な生き方の中から均等に発生してくるものである。

5 事前に細部まで煮詰められた計画的なスタイルの文化よりも、人々の気ままな生き方の中から、自由な発想に基づいて生み出された文化の方が高い価値を有している。

(C) ——— 線部(3)について。その意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 望ましい条件がたまたま都合よくそろうこと。

2 後先を考えず、提示された案に飛びつくこと。

3 避けたかった事態が結果的に利益をもたらすこと。

4 窮境において、ほとんど唯一の選択肢であること。

5 幸運が連続して起き、かえって不安になること。

(D) ——— 線部(4)について。その具体的な説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 これまでもずっと成り行き任せの旅をしてきたおかげで、予想外の事態をうまく回避できるようになった。

2 特定の目的のための出張であっても、道くさを愉しむ余裕のあった方が、かえって目的をよりよく実現でき^{きる}る。

3 今回の旅では幸運にも有益なシンポジウムに参加できたが、たとえそれがなくても無計画な旅の方が楽しい。

4 十分な事前準備なしに旅に出たため旅程が狂ってしまったが、そのせいで想定外の学問的収穫があった。

5 特に海外旅行においては何が起きるか分からないので、あらかじめ周到な計画を立てても意味のないことが多い。

(E) 線部(5)について。その具体的なあらわれとして、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを

2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 旅にトラブルはつきものであるから、台本という型を想定することは難しい。

ロ 即興性に基づく旅であっても、想定外の事態に対処するため事前の訓練を積まなければならないという意味で、完全に場当たりのものではない。

ハ 台本に基づく旅は、事前の計画に従った安全な体験しか旅行者に提供しえない。

ニ 旅において即興性という型が強まるほど、むしろ事前にコースを定めやすくなるという矛盾した関係が存在する。

ホ 台本という型に縛られた旅行のスタイルは、安全ではあるがマンネリ化してつまらない。

(F) 線部(6)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 役者たちが独自に身につけてきたラッチの優劣を、様々な情景や場面において競うこと。

2 役者が台本を記憶し、吐き出すのではなく、むしろラッチを交えて楽しみながら演ずること。

3 役者だけでなく、観客までもがラッチを理解することで喜劇の共同参加者となること。

4 台詞セリふが問いかけと答えという形態をとることにより、役者たちの演技の躍動感が増すこと。

5 事前に訓練によって蓄えられたラッチを、役者たちが一定の共通了解のもとで出し合うこと。

(G) 線部(7)について。これは具体的にはどのようなことか。句読点とも二十五字以内で説明せよ。

※ 大問二については著作権の関係により掲載できません。
引用した文章は次の通りです。

・大問二 細馬宏通『フキダシ論』

三 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答题紙に書くこと)

野は ・萩(注1)咲きて、秋のけしきほど、しめやかにおもしろき事はなし。⁽¹⁾心ある人は歌こそ和国の風俗なれ。何によらず、花車の道こそ一興(注2)なれ。

奈良の都のひがし町に、しをらしく住みなして、明暮茶の湯に身をなし、興福寺の花の水をくませ、かくれもなき(注3)樂助(注3)なり。

ある時、この里のござかしき者ども、朝顔(注4)の茶の湯をのぞみしに、かねがね日を約束して、万に心をつけて、その朝(注5)七つよりこしらへ、この客を待つに、大かた時分こそあれ、昼前に来て、案内をいふ。

⁽²⁾亭主腹立(注6)して、客を露路(注6)に入れてから、提灯をともし、迎ひに出づるに、客はまだ合点ゆかず、夜(注7)の足元(3)するこそをかしけれ。あるじおもしろからねば、花入(注7)れに土つきたる芋の葉を生けて見すれども、その通りなり。とかく心得ぬ人(5)には、心得あるべし。亭主も客も、心ひとつの数寄人(注8)にあらずしては、たのしみも欠くるなり。

むかし功者なる、茶の湯を出だされしに、庭(a)の掃除(b)もなく、梢(注9)の秋のけしきをそのまま(注8)にしておかれしに、客もはや心を付けて、いかさまめづらしき道具(注9)出づべきとおもふに、案(注9)のごとく掛物(注9)に「八重(注9)葎(注9)しげれる宿」の古歌を掛けられる。^(注10)

またある人に、漢(注10)の茶の湯を望みしに、諸道具(注10)みな唐物(注10)をかざられしに、掛物ばかり、阿倍仲麻呂(注11)が詠みし、「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」の歌を掛けられたり。いづれも感ずるに、「この歌は仲麻呂、唐土から古里をおもって詠みし歌なり」と、しばらく亭主の作の程をながめけるとなり。「客もかか人こそ、この道をすかるる甲斐あれ」と、ある人の語りし。

〔『西鶴諸国はなし』による〕

(注) 1 花車——みやびやかな芸術。

2 興福寺の花の水——興福寺の西金堂のほとりにあった名水。

3 楽助——気楽に暮らす者。

4 朝顔の茶の湯——昔、千利休の庭に朝顔が見事に咲いていると聞いた太閤秀吉が、これを見ようと訪れると、庭には朝顔がなく茶室にのみ朝顔が活けられてあったので感心したという故事により、江戸時代初期によく行われた茶事。

5 朝七つ——午前四時ごろ。

6 露路——茶室への通路。

7 芋の葉——さつま芋の葉。さつま芋はヒルガオ科で、花は昼顔のごとく朝顔に似る。

8 掛物——床の間の掛軸。

9 「八重葎しげれる宿」——惠慶の和歌「八重葎茂れる宿のさびしきに人こそ見えぬ秋は来にけり」(『拾遺和歌集』など)。

10 漢の茶の湯——唐物(中国より舶来の品)を用いてする茶の湯。

11 阿倍仲麻呂——奈良時代の人。渡唐して玄宗皇帝に仕えた。官を辞し日本に帰国しようとしたが暴風のため果たせず、ふたたび唐朝に仕え、唐土で没した。

問

(A) 空欄 に入る語として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 梅 2 菖蒲 3 水仙 4 藤 5 菊

(B) ——線部(1)の現代語訳を八字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(C) ——線部(2)について。亭主はなぜ「腹立」したのか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 客が時間に遅れたのに、亭主に口先だけのいいかげんな詫び方をしたから。

2 客が亭主をさしおいて、茶の湯の案内をしたから。

3 亭主がせっかく準備をしたのに、客が茶の湯の作法を分かっていたいなかったから。

4 客がわざと遅れてやって来て、亭主をからかおうとしたから。

5 早くから日時を約束していたのに、客がその時間を忘れていたから。

(D) 線部(3)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 夜道で足元にあるものを探そうとする

2 夜になってから改めて足を運ぼうとする

3 夜道を歩く人を気遣おうとする

4 夜道を歩くのを楽しもうとする

5 夜道に行くような歩き方をしようとする

(E) 線部(4)はどのようなことを表しているか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 亭主が客への謝罪の意を示したのも当然だということ。

2 客が亭主にまだ抵抗しようとしていること。

3 一見無作法な亭主の行為も、この場ではかえってふさわしいということ。

4 客が亭主の行動の意味を、依然として理解できていないこと。

5 客が亭主のもてなしの心に気づいて、それを素直に受け入れていること。

(F) 線部(5)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 雅趣を解さない客には、亭主の側もそれなりの心づもりが必要になる。

2 無作法を許さない亭主かどうか、客の側もあらかじめ分かっておく必要がある。

3 茶の湯の場で困らないためには、亭主も客も作法を十分に修得しておく必要がある。

- 4 茶の湯の作法や風流を知らない客には、亭主がそれを教えてあげる必要がある。
- 5 無作法なことをする亭主に対しては、客も臨機応変な対応が必要になる。

(G) 線部(a)～(d)の文法上の意味として最も適當なものを、次のうちから一つずつ選び、それぞれ番号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

- 1 推量 2 意志 3 可能 4 過去
- 5 尊敬 6 受身 7 断定 8 存在

(H) 線部(6)、「庭の掃除もなく、梢の秋のけしきをそのままにしておかれし」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適當なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 庭をあえて掃除せず荒れたままにすることで、茶道具の素晴らしさを際立たせるため。
- 2 秋の景色をそのまま残しておかないと、秋ならではの風情が客に伝わらないため。
- 3 庭の掃除に手間をかけず、そのぶん茶の湯での客のもてなしに全力を傾けるため。
- 4 掛物の古歌にあわせ、あえて庭を手入れせずそのままにして客をもてなすため。
- 5 秋の景色を好む客の趣味に心をあわせて、一緒に茶の湯を楽しむため。

(I) 線部(7)の説明として最も適當なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 仲麻呂の歌の素晴らしさを知っているゆえ、場違いであつてもあえて用いた亭主の英断。
- 2 その場の誰も気づかなかった仲麻呂の歌の意を理解し、もてなしに用いた亭主の気転。
- 3 仲麻呂の歌の意を理解したときに、はじめて趣向が分かる仕組みにして用いた亭主の工夫。
- 4 中国の諸道具のなかに、うかつにも日本の仲麻呂の歌をまじえてしまった亭主の失態。
- 5 仲麻呂の歌を、さもみずからの作であるかのように装って掛物に用いた亭主の愚行。

(J) 線部(8)の解釈として最も適當なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 客の好みを解する亭主

- 2 亭主の心配りを解する客
 - 3 茶の湯の作法をよく知る亭主
 - 4 茶道具の価値がわかる客
 - 5 和歌の心を良く知る亭主
- (K) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。
- イ 茶の湯ではむやみに高価な品を用いてはならない。
 - ロ 茶の湯では亭主と客との意思の疎通が重要である。
 - ハ 昼間に茶の湯を催すのは困難である。
 - ニ 茶の湯に古歌を用いるのは避けるべきである。
 - ホ 茶の湯に限らず和歌を解する心があるとおもしろい。

【以下余白】

